大阪府教育センター附属高等学校
校長　寺田　明彦

令和３年度　学校経営計画及び学校評価

１　めざす学校像

変化の激しい社会の中で、豊かな感性、確かな学力、あくなき探究心をもって生き抜く子どもたちを育てる学校
　１　学びに向かう意欲を高め、自己実現に導く教育活動を展開する。
　２　確かな信頼関係を基盤に、豊かな人間力を育む教育活動を展開する。
　３　先進的・先導的な教育実践に、教育センターと一体となって取組みを進める。

２　中期的目標

１　豊かな感性の育成
　（１）多様性を認める人間関係のはぐくみ
　　ア　誰もが個性や趣向を肯定され、安心して学校生活が送れる居場所としての集団づくりを進める。
　　イ　人権教育を基盤とした生徒指導と細やかな生徒観察により、課題の早期発見に努める。
　　ウ　情報リテラシーの育成を図る。
　※学校教育自己診断（生徒）で「クラスには自分の居場所がある」の肯定的回答率（H30：82.6%、R01：81.6% 、R02：84.1%）を令和５年度には 85%以上にする。
　（２）安全で安心な学びの場とするための環境整備
　　ア　すべての教職員が危機意識を持ち、危険予知に関する知識と緊急事態への対応能力を向上させる。
　　イ　生徒が気軽に相談できる環境を整備する。
　　ウ　いじめを見逃さない教職員集団を作る。
　　エ　中学校等との連携を進め、教育相談体制のさらなる充実を図る。
　※学校教育自己診断（生徒）で「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる」の肯定的回答を（H30：63.2%、R01：60.8%、R02：67.5%）を前年度比で増加させ、令和５年度には 75%以上にする。
　※学校教育自己診断（保護者）で「学校は、生徒をきめ細かく、多面的にサポートしている」の肯定的回答を（H30：73.4%、R01：65.6%、R02：67.9%）を前年度比で増加させ、令和５年度には 75%以上にする。

２　確かな学力の育成
　（１）教育センターと一体となった教育実践の研究
　　ア　タブレットを活用した授業についての研究・実践を重ね、成果を発信する。
　　イ　観点別学習状況評価についての研究・実践を重ね、成果を発信する。
　　ウ　授業研究やカリキュラムマネジメントにおけるアドバイザーとして教育センターのリソースを活用する。
　（２）基礎学力の定着をめざした授業研究・改善への取組みとその成果の発信
　　ア　知識・技能の活用を図り、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力を育む。
　　イ　学びを活かそうとする意欲の向上を図る。
　　ウ　読解力の育成・充実を図る。
　※学校教育自己診断（生徒）で「授業はわかりやすく、教え方に工夫をしてくれる先生が多い」（H30：54.7%、R01：53.9%、R02：63.5%）を前年度比で増加させ、令和５年度には 75%以上にする。

３　あくなき探究心の育成
　（１）探究活動の充実とその成果の発信
　　ア　教科横断型である探究ナビを本校教育活動の軸と位置付け、活用型の授業に取り組む。
　　イ　「社会人基礎力」の育成を意識した授業実践を行う。
　（２）自ら学ぶ生徒の育成
　　ア　自ら学びに向かう力を育成し、授業以外での学習習慣を付けさせる。
　　イ　卒業生の進路未決定率を３%未満にする。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［令和　　年　　月実施分］	学校運営協議会からの意見

大阪府教育センター附属高等学校

３　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標［Ｒ２年度値］	自己評価
1 豊かな感性の育成	（１）多様性を認める人間関係のはぐくみ ア）居場所としての集団づくり イ）課題の早期発見 ウ）情報リテラシーの育成 （２）生徒にとって安全で安心な学校生活のための環境整備 ア）危険予知及び緊急事態への対応能力の向上 イ）相談できる環境の整備 ウ）いじめの未然防止・早期発見・早期対応のための教職員集団 エ）教育相談体制及びガイダンス機能の充実	（１）多様性を認める人間関係のはぐくみ ア）より良い人間関係が構築できるように、クラスづくりの導入となる活動を取り入れる。また、授業等において、積極的に発表したり、意見が言いやすい雰囲気づくりをめざす。 イ）支援の必要な生徒の情報を、担任会や教育支援委員会を中心に共有し、課題が深刻化しないように努める。 ウ）あらゆる教育活動を通して、適切な情報の収集、発信、活用について啓発を行い、情報リテラシーを高める。 ア）①懸念される現実的な災害を想定した訓練を実施する。 ②感染症拡大による臨時休校等の緊急事態に備え、連絡体制を整える。 イ）①教科の準備室や職員室付近で気軽に質問や相談ができる場を拡充する。 ②部活動における複数顧問等による役割分担、終了時間を定めた会議の運営により、相談時間が確保できるようにする。 ウ）アンケート等を効果的に活用し、課題の把握に努め、教育支援委員会等により教職員間で情報を共有し、深刻な問題に発展しないよう未然防止に努める。 エ）多様な進路を実現するため、相談しやすい体制づくりを進め、将来を見据えた科目選択を支援する。また、相談体制を整えるための教員研修を実施する。	（１） ア）①学校教育自己診断（生徒）で「クラスには自分の居場所がある」の肯定率が前年度を上回る[84.1%] ②学校教育自己診断（生徒）で「授業で自分の考えをまとめたり、発表する機会がある」の肯定的回答率 85％以上[82.8%] イ）学校教育自己診断（生徒）で「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる」の肯定的回答率 70％以上[67.5%] ウ）SNS 等、ネット上での課題事象の減少及び課題事象発生時の適切な対応 ア）学校教育自己診断（生徒）で「防災や防犯について、緊急時の行動を知らされている」の肯定的回答率 65％以上[60.0%] イ）学校教育自己診断（生徒）で「自分は大切にされていると感じることがある」の肯定率 70%以上[66.1%] ウ）学校教育自己診断（教職員）で「いじめ（疑いを含む）が起こった際の体制が整っており、迅速に対応することができている」の肯定的回答率 90％以上の維持[91.2%] エ）①学校教育自己診断（保護者）で「学校は、生徒をきめ細かく、多面的にサポートしている」の肯定的回答率 70%以上[67.9%] ②学校教育自己診断（生徒）で「いじめについて困っていることがあれば真剣に対応してくれる」の肯定的回答率 75%以上[70.6%]	
2 確かな学力の育成	（１）教育センターと一体となった教育実践の研究 ア）タブレットを活用した授業についての研究・実践 イ）観点別学習状況評価についての研究・実践 ウ）教育センターのリソースの活用 （２）基礎学力の定着をめざした授業研究・改善への取組み ア）知識・技能の活用を図り、	（１）教育センターのリソースを活用しながら一体となった授業研究や授業実践を行い、その成果を校内で共有するとともに発信する。 ア）タブレット１人１台の環境の下での授業について、事務局とも連携しながら実践研究を進める。 イ）観点別学習状況評価の本格実施に向けて、本校の状況に合わせた評価指針を策定する。 ウ）教育センター大ホールを授業の成果発表の機会として活用したり、授業に関するアドバイザーとして指導主事を活用する ア）授業研究委員会、教科会議において、	（１） ア）学校教育自己診断（生徒）で「コンピュータやプロジェクタなどを使った授業がある」の肯定的回答率 85％以上[80.7%] イ）計画どおりに策定する ウ）定例の会議や大ホール借用の行事に加え、各教科で複数回、指導主事からのアドバイスや情報提供を受けるようにする。 （２） ア）①授業アンケートで「知識や技能が身に	

	未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力の育成	学力生活実態調査や実力テスト等の結果を分析し、学んだ知識・技能の活用を想定した授業づくりを進める。	付いたと感じる」の全平均が、前年比を上回る。[3.13] ②生徒への授業アンケートで「授業内容に興味・関心を持つことができたと感じている。知識や技能が身に付いたと感じる」の全平均が、前年比を上回る。[3.12]	
	イ）学びを活かそうとする意欲の向上	イ）各教科で付けたい力を生徒に伝え、各教科での学びを活用できるような課題を取り入れ、意欲を向上させる。	イ）学校教育自己診断（生徒）で「授業はわかりやすく、教え方に工夫をしてくれる先生が多い」の肯定的回答率 68%以上[63.5%]「頑張ろうと意欲をかき立てられる授業がある」の肯定的回答率 60%以上[54.2%]	
	ウ）読解力の育成・充実	ウ）①入学当初の授業以外の学習時間を維持し、年次進行とともに増えるよう学習習慣を定着させる。また、適切な課題を設定し、授業以外に学習しやすい環境を整える。 ②すべての教科で、読解力の育成をめざした取組みを実施する。読書等、文章を読むことを啓発するとともに、引き続き図書室の整備を進める。	ウ）①１月実施の１・２年次生対象のアンケートにおいて、ほとんど学習しない生徒の割合を、前年度比で減少させる。[１年次生 46.2%、２年次生 57.6%] ②図書室の利用者数（授業での利用を除く）を前年度より増加させる。[12 月末現在 326 人]	
３　あくなき探究心の育成	（１）探究活動の充実 ア）探究ナビの再構築 イ）「社会人基礎力」の育成 （２）自ら学ぶ生徒の育成 ア）学ぶ力の育成 イ）希望進路の実現	（１）探究ナビをはじめとする探究活動を充実させ、その成果を発信する ア）本校教育活動の軸と位置付けている探究ナビ再構築の最終年度として、３年間を見通した指導計画を策定する。 イ）各教科で「社会人基礎力」（実社会で必要かつ役立つ力）の育成を意識した内容を授業に取り入れ、成果を検証する。 （２）自ら学ぶ生徒を育成する。 ア）授業以外での学習習慣をつけさせるとともに、学ぶ意欲を喚起し、生徒の進路実現を図る。 イ）一人ひとりの希望進路を実現するため、将来を見据えた科目選択を含む教育課程を編成するとともに、講習等の個別の支援を実施する。	（１） ア）学校教育自己診断（保護者）で「将来の進路や職業などについて適切な指導を行っている」の肯定的回答率 83%以上[81.6%] イ）学校教育自己診断（生徒）で「将来の進路や生き方について考える機会がある」の肯定的回答率が前年度を上回る[80.8%] （２） ア）卒業時の進路未定者を３年次生徒の３％以内にする。 イ）計画どおり編成、実施する。	